

「社会人の教科書」という本からです

苦手な人には『惚れ力』を発揮

以前、ブライダル関係の会社の方に、社内の勉強会で講演をお願いしたのですが、その方の言葉にユニークなフレーズがありました。「なかなか結婚できない人は、惚れ力を磨け」結婚相手に求める条件に固執して、あら探しばかりをしてはいけません。相手のどこか良いところを探して、そこに惚れる。それが「惚れ力」だそうです。

入社して間もない若手にとって、職場の人間関係は、社会の全てに感じられても不思議ではありません。上司や先輩との関係が上手くいかないと、それが大きなストレスになることも考えられます。

人間関係をストレスにしない方法、それが「惚れ力」です。職場でも相手の良いところを見るようにして下さい。苦手な上司、嫌いな上司に対しては、なおさら「惚れ力」を駆使すべきなのです。

多かれ少なかれ、誰もが人に誇れる何らかの経験を持っているものです。良いところもあるはずで、欠点は誰にでもあり、悪いところを見るときりがありません。この上司は話が長いから嫌いだ。そこで終わらせずに、その上司の豊富な経験と知識は勉強になるのではないかと考えてみて下さい。そうすれば、頻りに話を聞きに行こうと考えます。話が長いという欠点は、何か理由をつけて終了時間を決めてからミーティングに入れば解決できます。この上司は頭の固い親父だから嫌いだ。しかし、軸はブレないシイザという時に頼りになる。そう考えれば嫌いな上司を避ける理由がなくなります。誰にでも必ず得意なところがあり、その部分だけを参考にすればいいのです。

嫌いな部分、苦手な部分は、単なる特徴と捉えればいいのです。その人にはどういう強みがあるのか。そう考えながら人と付き合ってみて下さい。

人は自分に好意を持ってくれる人を邪険に扱いません。しかし、相手から嫌われているという空気は必ず伝わります。どんなに気難しい上司でも、よいところを見つけて尊敬すれば、おそらく嫌われることはないでしょうし、チャンスをもらうこともできると思います。むしろ、嫌いな人、苦手な人ほど懐へ飛び込むべきだと僕は思います。お昼にでも誘ってじっくり話をすれば、そんなに悪い人ではないかもしれません。以前、こんな事を言われました。「岩瀬君は、人の才能を好きになる力がある」僕の長所は人の事を好きになれる事です。人を好きになれば、人のよいところを見出すことができると思います。

世の中、つまらない人、嫌な人は1割もないと思います。誰もが面白くて良いと認める人は3割くらいでしょうか。半数以上の方は、良い面とイヤな面を両方持った人だと思っています。そんな人は、こちらの関わり次第で良い面をクローズアップすることができるのです。

会社は様々な特徴をもった人間同士が、家族よりも長い時間を過ごす場所です。だとすると、働くという事は、何かを成し遂げる以上に人と人のやり取りが大切になってくるのではないのでしょうか。職場で得る知的な刺激や人との触れ合いで、喜んだり怒ったり泣いたりすることが、本質のような気がしています。外資系出身でMBAホルダーの僕がこんな事を言うと、以外だと驚かれる人もいます。しかし、この本でも再三人付き合いについて書いているのは、こういう思いが根底にあるからなのです。

「惚れ力」とは

()